

6世紀半ば、中国、朝鮮半島を経由して日本に仏教が伝来しました。6世紀末に建てられた日本初の本格的伽藍を備えた寺院である飛鳥寺は、仏教の伝来とともに、土木や建築を初めとした最新技術や知識を取り入れたことを示しています。その後、仏教受容と寺院造営が奨励され、飛鳥寺、山田寺、橘寺、檜隈寺など、有力氏族は競って寺院を建て始めました。

さらに天皇家の発願により川原寺が造営され、仏教は次第に国家の統治機構に組み入れられていきます。

飛鳥から藤原へと宮殿が遷る頃には、大官大寺や本薬師寺など、あらかじめ藤原京の都市設計に組み込まれた、国家鎮護を目的とした寺院が現れました。



あすか であと
5 飛鳥寺跡



たちばなであと
6 橘寺跡 (橘寺境内)



やまだ であと
7 山田寺跡



かわはら であと
8 川原寺跡



ひのくま であと
9 檜隈寺跡



しょうぶ いけ こふん
11 菖蒲池古墳



だいかん だいじ であと
15 大官大寺跡



もとやくしじ であと
16 本薬師寺跡



いしぶたい こふん
10 石舞台古墳



けんごしづか こふん
12 牽牛子塚古墳



てんむ じとうてん のうりょう こふん
17 天武・持統天皇陵古墳



なかおやま こふん
18 中尾山古墳

「飛鳥・藤原」以前の古墳時代、大王や有力氏族は、巨大な前方後円墳を頂点とする古墳の築造により政治秩序を示す、独自の文化を形成してきました。しかし、中国や朝鮮半島の影響を受けた新たな国づくりにもない、古墳の規模や形状にも変化が現れます。

最上位層の古墳は、石舞台古墳、菖蒲池古墳など、前方後円墳から大陸風の方墳へと変化しました。さらに中央集権体制の整備が進み、牽牛子塚古墳、天武・持統天皇陵古墳、中尾山古墳など、八角形の墳墓を創り出し、墳墓の頂点に位置づけました。

また、極彩色の壁画を石室内に描いたキトラ古墳や高松塚古墳は、遣唐使に代表される中国や朝鮮半島との国際交流を物語る墳墓です。



こふん
19 キトラ古墳



たかまつづか こふん
20 高松塚古墳